空色ダイアリー

みやりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空色ダイアリー

【Ｎコード】
Ｎ１０００Ｉ

【作者名】
みやりん

【あらすじ】
受験を控えた女子高生「白井怜奈」。高３の冬、絶望のどん底におちてしまう。好きな人は奪われ、病気にかかって残りの寿命三ヶ月といわれた……。

プロローグ

――――――今年もまた、冬が来た。

私が、絶望のどん底におちた冬。

何もしてないのに、この季節を過ごしてると、悲しくなる。

降る雪を、ずっとながめてた。

第一話【片思い】

忘れもしない、高校3年生の冬。

受験を控え、あたふたでなんだかんだと忙しくなり始めた冬。

好きな人がいた。名前は「江口　海斗」。

さわやか君？で、よく私をからかう。同じ班で、掃除時間なんかも二人でサボって話してたこともあった。

だけど、もう一人、班には、いわゆる「ライバル」がいた。

「松雄　咲」。

運動神経がよくて、頭もよく、可愛いモテ女子。

当然、ほとんどの女子から嫌われてた。

もちろん、私も嫌い。

モテてるから、といって調子に乗り、男子の前では優しい＆明るい女子を演じてた。

咲の隣はちょうど海斗。咲の前が私、「白井　怜奈」。

ちなみに私の隣は「林田　慎」。

先生のＢＬ（ブラックリスト）に乗ってるほどの悪がき（笑）

でも、以外に優しいところもある、不思議な男子。

私的には、嫌いな男子ではない。

私の班はこの四人。

私は、女子の中では嫌われてない方。

今は、得意だったバスケ部を引退し、K大学の受験勉強の真っ最中。

そんな私の悩み。やっぱり恋愛関係。

さっきのように、咲は男子の前では「明るい&優しい」女子だ。

でも、たまにぶりっ子が入る。

男子は、そこがいいというのだけど…どこがいいのだか。

しかし、女子に対する性格が全く違う。

後輩はパシりまくり、嫌いな人は徹底的にハミる。

だから女子には嫌われるんだ。

海斗が…そんな奴と話してるところを見ると、正直つらい。

そして今…咲と海斗は最近仲いいし、物の貸し借りもしてるらしくて、風のうわさでは、「海斗は咲がすき。」なんてこともあった。

すごく…きつい。

授業中も給食時間中も二人、ずっと話してるし、帰りとか、たまに一緒に帰ってる時も何度か見たことあった。

やっぱり、嫌いな人と好きな人が仲良くしてるところを、毎日目前でみてると、泣きたくなる…。

そして、ある日…聞いてみた。…海斗に。

「ねぇ、海斗ってさ、…咲の事好きなの…？」

返事は…「…そうだよ。」

――――――――最悪。

第二話【絶望】

「…そうなんだ…」

「…何で…？」

海斗…照れてる。そりゃそっか。

「…べっつにぃ♪頑張れよっ☆」

明るく振舞う。海斗の肩をバシッとたたいた。

「いって！」

「あははっ」

あぁ～、やばい。…泣きたい。

心臓痛い。逃げたい。

「てめっ、思いっきり叩いただろっ！？」

「もう忘れた～♪」

「……（怒）」

海斗が私の頭をチョップで仕返しした。

「痛っ！」

「…ぶっ」

海斗が噴出した。

「ちょ、ちょっとっ！もう～！」

「はは、バ～カ！」

笑ってないで早くどっか行って！

出そうな涙を必死にこらえた。

「てゆうか、用そんだけ？」

「そんだけ！」

「じゃぁ、俺行くからな。」

「うんっ、じゃぁねん♪」

手を振って、走ってトイレに向かった。

個室のドアをばんっとしめて、声を殺して泣いた。なき続けた。

――――――――キーンコーンカーンコーン…

「あっ、授業始まるっ！」

真っ赤な目を隠すように、教室へ戻り、席に着いた。

先生の話なんて、耳に入らなかった。

恋って、こんなに辛いものなんだ、って初めて思い知った…。

今まで彼氏がいなかったって訳じゃないけど、でも、恋愛でこんなに悲しい思いをしたのは初めてだから。

みんなも、分かると思う。

だって、好きな人の好きな人は嫌いな人なんだから。

…意味わかんないけど…（笑）

考え事をしてたら、早くも授業が終わってしまい、給食の時間。

私にさらなる悪い出来事が起きた。

多分、人生で最大の出来事。その事をしったとたん、絶望した。

希望どころか、光さえ見えなかった。

その日は、売店でパンを買った。

大好きな「チョコメロン」。…なのに、パンが喉を通らなかった。

とてもまずく感じた。

やっとメロンパンを完食。次は、サンドイッチだ。

はぁ、と一度ため息をついた。

口に運ぼうとしたとたん…喉に激痛が走った。

「――――っ！？」

サンドイッチを片手に、喉を押さえた。

隣では、咲と海斗が楽しそうに話してた。

何これ…喉痛い…っ…。

針が刺さってる様な感じ。てゆうか、喉が焼けそうに熱いっ…

慎が、ふとこっちをみた。

「…白井…？」

「…ぇ…？」

かすれた声で返事をする。息を吸うたび全身に激痛が走った。

「喉痛ぇの？」

「ぇと…だ…大丈夫…」

隣では、海斗と咲が、まだ楽しそうに話してる。

「おい、白井…？」

慎が心配そうな顔をする。

ピアスを両方合わせて６つつけ、髪を染めてるチンピラな顔には合わない顔。

「ケホッ…」

一度咳をした。

喉の奥で、血の味がした。

とっさに喉を押さえてた手で口を被った。

「―――ゲホッ、ゲホッ、…ゴホッ、ゲホッ…」

喉がキリキリする…っ

一度口を被ってた手を見てみた。そして、目を疑った。

手には、真っ赤な血がべっとりとついてたのだ。。。

慎はそれにはまだ気づいてない。

咳の勢いは止まらなかった。

息が…できない…っ！

「おいっ、白井！？大丈夫かよっ！？」

「ごめ…っ、ゲホッ、ゴホッ…」

海斗と咲も会話をやめていた。サンドイッチが机の上におちた。

喉がっ……息が……っ

「はぁっ、ゲホッ、ゲホッ…」

「怜奈〜っ！？」

「白井・・・？」

クラス中がざわつきはじめた。

いつの間にかみんなが私の班の周りに集まってた。

手の隙間から、血がポタリと落ちた。

「血だ！」

「大丈夫！？」

先生も駆けつけてきた。

「白井さんっ！？大丈夫っ！？」

「だっ…ゴホッゴホッ…」

咳の勢いは止まらず、血の勢いも止まらなかった。

ポタポタと、血が机を汚していった。

「おいっ、白井っ！？」

「ごめ…っ、はぁっ、はぁ…っ」

気が遠のいてく。もうムリ……っ

――――――バタッ…

第三話【病気】

ピッ―ピッ―ピッ―ピッ―ピッ―ピッ―ピッ―ピッ―

――――――何の音？

そっと、目をひらいた。

「……。」

ここ…どこだろ。

病院…？…そうだ、私…学校で、咳でて…

……？

その時――――――

ガララララッ

入ってきたのは…

「お父さん、お母さん…」

一瞬、二人とも目を丸くしたが、やがて…

「怜奈っ！目覚めたの！？」

「……？」

「三日間ずっと眠ってたんだぞ！」

「目が覚めてよかった……」

三日間…？そんなに…？

「ねぇ、私…どうなったの…？」

さりげなく聞いた一言。

母が絶句した…

「お母さん…？」

「…怜奈。」

お父さんが、口を開いた。

「…？」

「驚かないで聞いてくれ。…ガンなんだ。」

「…え？」

「怜奈は、命が残りわずかなんだ。」

お父さんの声が震え始めた。

「……？」

意味が…わかんない。

どうゆうこと？ねぇ、何がどうなってるの？

「怜奈は、リンパ線ガンなんだ。もう、肺に大きなガンが出来てるんだ。もう…助からないんだ。」

「何それ。。。」

肺ガンって事…？

夢…？夢なの…？

夢なら早くさめて…！

お母さん、早く起こしてよ！！

「怜奈…っ！」

お母さんが泣き始めた。

やだよ…死んじゃうなんて。

もっと…したいこと、いっぱいあるのに。。。

いつの間にか、口癖になっている言葉。

——最悪。

第四話【友達】

今日は、お父さんもお母さんも仕事でいない。

あの日から、もう一週間が経っていた。

「……。」

あれから、すごく無口になったな。と、自分でも実感する。

窓から見える空を、ずっと見てた。

私が死んだら…あそこに行くのかな。

――――ガララララッ

「失礼しま～すっ」

入ってきたのは…

「椿っ！亜矢っ！」

「あぁ～！怜奈っ！元気そうじゃんっ！」

「おひさぁ～♪」

二人は、私の大親友。

「野沢椿（ノザワ ツバキ）」。
美人で、超明るい女の子！お姉さん的存在で、モデルをしてる、私の自慢な友達♪
「佐々木亜矢（ササキアヤ）」。
超天然な女の子で、おっとり系。みんなから好かれてて、大好きな友達。
私達三人は、小学校の時からの友達。
いつも一緒だった。
二人に会ったとたん、海斗や咲、肺ガンの事などぶっ飛びそうになった。
けど、そうにはいかなかった。
この二人にも話さなきゃなぁ。
「もぉ！メールしたのに何で返事しないの～！？」
最初に話題を作ったのは、椿だった。
「ごめ～んっ！お母さんが『持ってたらずっとつかうでしょ』って言って没収されたぁ」
「あははっ、没収とか、どんまいじゃぁん♪」

ホントは、嘘だ。

何て返事すればいいのか分からなくて、返事しなかったのだ。。。

今、本当は、たんすの中にある。

「てゆうかっ！海斗どうなったの～！？」

「え…」

「そうそう！この前『咲がすきなのか聞いてみる！』って言って結局結果聞いてないし～！」

「…どうなったと…思う？？」

二人は一瞬考えて、言った。

「ホントは怜奈のことが好きだったとか！？」

「ん～…」

亜矢はまだ悩んでるようだ。

「亜矢ぁ～？？」

「ん～……」

「答えはっ！？」

「あと五分…」
「……」
五分も待てないって。
「う〜〜〜ん……」
「「亜矢ぁぁ〜、早くっ」」
椿と一緒に叫ぶ。
「……あっ！！！」
「何！？」
「聞けなかった…とか！？」
「あんだけ考えてそれだけかよっ（笑）」
「だだだっ、だってぇ〜…分かんないもんっ！そんなのっ！！」
意地を張る亜矢。いつもどおりの風景に、顔が自然と緩んでしまう。
「「正解はっ！？」」
二人が一斉に聞いた。
「二人ともブブ〜ッ！間違いっ！」
「えぇっ！？」

「実はね…」

自然と悲しくなる。そりゃそっかぁ。。。

「海斗、咲の事、ホントに好きなんだってぇ。。。」

椿も亜矢も、一瞬驚いた顔をして、落ち込んだ。

「大丈夫なの？」

「平気～っ♪」

「も～っ、咲むかつく～っ！！」

椿が言った。

「何だよあいつ～っ！」

…確かに。

咲がいなかったら、今頃私は肺ガンだけですんだのかも。

咲がいるせいで、私は体だけじゃなく、心もボロボロになっちゃったんだから。

「気にしなくていいからねっ！」

「……うん。」

「それより喉渇いた～っ！」

亜矢が話を変えた。

「自動販売機ってある？…あ～、５０００円札しかないよ～…使いたくない～。。。

自動販売機で両替できたらいいのに…」

思わず噴出してしまう。

「そんな自動販売機あるかよっ（汗）一階の廊下か、売店に売ってあると思う♪」

「分かった～！行ってくる～っ！…売店！売店で両替してもらおっと♪」

「あっ！じゃぁうちもいこ～っと♪」

「行ってらっしゃぁい♪」

二人が病室から出て行った。

二人が戻ってきたら…言わなきゃ。

肺ガンの事と、寿命の事。

そう思うと、涙がでそうになった。

第五話【安心】

「おまったせぇ♪」

「ポカリ買ったぁ♪一緒飲も～☆」

二人が戻ってきて、病室が再びにぎやかになった。

…いわなきゃ。

「……あのねっ。。。」

「ん～？」

「まじめな話なんだけど……」

「何々～！？」

「私の病気の事…なんだけど…」

二人は一瞬とまどった。

「…何？」

さっきまでとは別人のように、私を真剣な目で見つめてきた。

「寿命…」

やばい…

「寿命がね、あと3ヶ月なんだって…」

泣きそう…

「もう…助からないんだって…。。。」

椿も亜矢も……みんなが絶句した。

三人全員が黙って、ピクリとも動かなかった。

私は…黙って…うつむいた。

何も動かない病室で、ただ時と、風だけが通り過ぎていった。

「――――――の…？」

「…え…？」

最初に口を開いたのは…椿だった。

「どうしてもっと早くに…言ってくれなかったの…」

「椿…」

椿の瞳には、涙があふれてて、今にも流れ落ちそうだった。

「そうだよぉ…」

「亜矢…」

亜矢はもうすでに、顔を涙でくしゃくしゃにしてた。

『ごめんね。』

こんな、たった一言が口に出せなかった。

必死に押さえてた涙を、開放した。

ちがう。

無意識のうちに、涙が流れてたんだ。

「亜矢…椿ぃ……ご…ごめ…」

「バカァァ〜！怜奈のあほぉ〜！謝るなぁぁっ！」

亜矢が号泣…。

「亜矢〜…」

「なきすぎ～…」

椿も、そんな亜矢を見て、ふと笑った。

私も少し、笑った。

「な～んで笑うかなぁ～っ…」

そして最後に…みんなで、笑った。

第五話【安心】（後書き）

更新遅くなりました。。。

ごめんなさい（笑）

第六話【発作】

『じゃぁ、がんばれよっ』

椿と亜矢は、そう言って、帰っていった。

心は、感謝で満たされて…

ありがとう…って、いいそびれちゃった。。。

その夜、お母さんがお見舞いに来た。

「失礼しまーす。」

「あっ！お母さんっ・・・！」

「元気～？？」

「…なぁに？それ。。。」

お母さんの手には、買い物袋があった。

「これ？これは～…秘密♪」

「……。」

「もぅっ！ツンツンしないのっ！これよこれ！」

「あっ！！！！！」

それは…私が入院する前、欲しがっていたミュージックプレイヤーだった。

「買ってきたの…？」

「欲しいって言ってたでしょ？いらないならお母さんもらってあげる♪」

「いっ、いるいるっ！！ちょうだいっ！」

「はいはい」

箱を開けた。

新品の本体とイヤホンだけをとって早速聞こうとした。

「あっ…曲入ってるの…？」

「大丈夫っ！いいから聞いてみなさぁい♪」

イヤホンを耳につけ、なれない手つきで電源を入れた。

中には、私が好きなアーティストの曲がたくさん入っていた。

他にもお母さんがすきそうな昔っぽい曲も入っていた。

「ありがとぉ～…お母さん～…」

ベッドに横になりながら、ずっと曲を聴いていた。
だんだんウトウトしてきた。
音楽聴いてたら、自然と眠くなっちゃうんだよね。。。
眠いーーー…

チっチッチッチッチ…

「ぅー…」

時計の針が動く音だけが病室に響く。

「……？」

あり？いつの間に眠っちゃってたんだ？
時計を見ると早くも深夜の2時を回っていた。

「ふわあぁぁ～…」

大きなあくびを何度か繰り返した。

「…あっ！」

ミュージックプレイヤー！

聞きながら眠ってたよね…？

あたりをキョロキョロ見回した。

テレビ台のところに、ミュージックプレイヤーと、紙が置いてあった。

『音楽聴きながら眠らないのっ！　ｂｙお母様♪』

……。。。

何気なくハイテンションだなぁ。

てゆうか、何でミュージックプレイヤーなんていきなり買ってきたんだろ？

……あぁ、そっかぁ。

もうすぐ、死んじゃうからかぁ。。。

海斗、どうしてるのかなぁ。咲に告白したのかなぁ…

慎、私の事、まだ心配してるのかなぁ。

ってゆうか、海斗、私の事心配してくれてるのかなぁ…

心配してくれてたら、嬉しいけど。。。

お見舞い…来ないのかなぁ？

その時だ。

「――――――――っ！！」

あの時と同じ。

喉に激痛が走った。

でも今回は違う。

胸が爆発しそうな感じ。

「…はぁっ、はぁっ」

息ができない…っ

ナースコール…っ

手探りでボタンを探す。だけど、なかなか見つからない。

「っ…ゴホッ…げほっ…」

ベッドのシーツに、赤い液がポタポタと落ちた。

…血だ。

「ゲホッ、ゴホッゴホッ…」

誰か……――――――

――――――――――「307号室っ、白井怜奈さんですっ」

「病室から移動しろっ！」

バタバタバタっ…

――――「発作！？何の…ですかっ？」

お母さんが、甲高い声で受話器を片手に震えていた。

『はい。もう落ち着きました…。」

「そ…そうですか。ありがとうございます…」

『今、別室に移動したので…。」

少し、今の状況を説明されて、お母さんは、「はい」としか言えなかった。

一時して、震えながら、受話器を戻した。

――――――――「…。」

そっと目を開くと、いつもと違う景色が入ってきた。

「うん…？」

「あら？目さめた？？」

そこにいたのは…看護婦さんだった。

二十代前半くらいの、きれいな看護婦さん。

「昨日、発作起こして、病室移動したのよ～。大丈夫？」

「あ…はぃ。」

――――――ガララララッ

入ってきったのは…

海斗…と、…咲。

――――――最悪。

第七話【失恋】

「あら？お友達？？じゃぁ、そろそろ出ようかな♪」

えっ…行っちゃうの？

できれば行かないでほしい。。。

「また後で様子みにくるからね～っ☆」

ガララっ…パタンッ

「よっ、久しぶりだなっ」

……帰ってよ。。。

「…おヒサしぶりっすッス。」

ちょっと戸惑っていった。

「怜奈ちゃんお久ぁ～♪♪♪」

「……」

何でよりによって二人で来るの？

もうやだぁ～…

「俺達さ。。。」

なんとなく予想はつく。

そんな事、いちいち言わないでよ。

「付き合うことになったんだ。。。」

顔を真っ赤にして言う。

やっぱり。

予想的中。

「へぇ。」

「お前も早く男できればいいな～。あ、できねぇか（笑）」

「うるさい。」

冷たい態度で接する。

「てゆうか、お前…あと、少ししか生きられないんだろ？」

「……」

どうしてそこなの。

むかつく。海斗って、こんな奴だったっけ。

「頑張れよ」

その一言を聞いたとたんだった。

心のそこで、何かがプツン…と切れた音がした。

それと同時に、ものすごい怒りがこみ上げてきた。。。

「いい加減にしてよっ！」

「……っ？」

「どうして…っ、どうしてそんなこと…言うの？一番言われたくなかったこと…っ。。。」

ベッドのシーツを握り締めた。

「海斗はっ…私が死ぬこと前提で来てるんでしょ？海斗の中ではっ…私はすでに…っ…
死んでるんでしょ？」

「ちがっ…」

「私はまだっ…生き……た…い…のに…っ」

涙が自然とあふれてくる。

「まだ…っ、したい事とかも…っ、たくさん…あるのにっ…！」

「ちがうって言ってんだろ！？」

「同じ事じゃんっ！来ていきなり…大丈夫なのか？とか…っ、どうしたんだ？とかじゃなくて…っ
俺達付き合うことになっただなんて…」

歯車が…とまらない…

「私はっ…あと、三ヶ月だけなのに…っ、幸せアピールされて…っ。。。」

「……」

「私の気持ちも考えてよぉっ！！！」

「…ごめ…」

「最低っ！！大嫌いっ！」

「……。」

「大体…っ、咲も咲だよ…っ！私の…幸せ奪って…」

「……」

咲が…私を鋭くにらみつけた。
何言ってるの…？
私…。壊れちゃったみたい…。
もう…嫌なのに……
「もう…やだ…」
まただ。体が一瞬しびれる感覚がした。
それと同時に、あの苦しさが再び戻ってきた。
「う…っ…ゲホッゲホッ…ゴホッ…」
「白井…っ！？」
私の体をあわてて支えようとする海斗。
それを…うらむように見つめる咲。
「げほっ…やめ…っ…かえっ…てっ！」
叫ぶと同時に、全身に激痛が走る。
「帰って…っ！…ゲホッゲホッ…っ」
「…帰ろ。」
咲は、猫のように私をにらみつけながら、鋭くそう言って、帰って

いった。

馬鹿みたい。何やってんだろ、私。

絶対…嫌われちゃったな、私。

――――――――最悪。

そのまま、ふらりと床に崩れ倒れた。

第八話【翔】

海斗と咲が来た日から、1週間がたった。
相変わらずお父さんもお母さんも毎日来る。
亜矢と椿はこないけど。。。
学校…どうなってるのかなぁ。
私、もう二度と学校行けないのかなぁ。
…はぁ…。
何で…私ばっかり…
目が潤んできたその時…
ガララララッ
「…え？」
誰？今、めちゃくちゃ昼だよ？しかも平日。
お母さんもお父さんも仕事のはず…
看護師さん…？
ドアから顔をだしたのは…
「…誰…？」

全く知らない人。私と同じ歳くらいの男の子。

「あ、ごめん。いきなり。」

「……？？」

「俺、隣部屋の病人。」

「お隣さん…」

整った顔に、ちょっと低めの声。

「えっ…なんか…な…なんですか…？？」

緊張でうまくしゃべれないー。。。

「何が？？」

ゆっくりこっちに歩いてきて、ベッドの隣のいすに座った。

「な…何か話しがあるんでしょ？？」

「別に。ただ暇だったから来ただけ。」

「何それ…」

ふとその男の子が笑った。

「あ、名前…何なの？」

「翔。お前は…「白井怜奈」…ね。」

「え…なんで…」

「書いてある。」

『翔』が、指さした方…後ろをみた。ベッドにご丁寧に『白井怜奈様』と書いてあった。

「あぁ…そうゆうこと。。。…歳は…？」

「17」

なんだぁ、同じ歳かぁ。

「じゃぁ、高校生なの？？」

「俺生まれたときから病院生活だったから。」

「あ……そう…なんだ……ごめんね？？」

「いいよ、別に。お前は？何で入院してんの？」

「あ…その…えっとぉ…病気に…かかって…」

「ふぅん…」

やっぱ…気まずい。何なんだろ、一体。私なんかに。

興味？本当に暇だったから？

絶対何かある。。。

「いきなり聞くけどさぁ。」

突然翔が口を開いた。

「お前…好きな人…とかいんの？」

「…ぅええ！？」

「っせぇな…」

「なっ…ななななっ…何で！！？？」

「…一週間くらい前…男と女二人来たとき…」

海斗と…咲の事・・・？

「少し覗いてたんだ。その時のこと。」

「……うん。。。」

「お前…あの時の男子の事、好きなんだろ…？」

・・・

「ん～…好き…だったかなぁ？」

「もう、違うんだ？」

「うん。てゆうか、何で分かったの？」

「勘。」

うわぁ。

「俺……」

ガララララッ

「怜奈ちゃ～ん♪検査の時間よ～♪」

「あ…はーい…」

翔は、黙って立ち上がり、帰ろうとした。

「えっ…さっき言おうとした事って…」

翔は振り返って、笑顔を見せると、また歩き出した。

何それ…。

翔が部屋からでたと同時に、看護婦さんがにやにやと見つめながら、

「じゃぁいこっかぁ」

と言った。

「あの！！そうゆう関係じゃありませんから！」

「どーゆー関係ー？？」

「え～…と、ふ、普通の友達ですからぁ！」

「またまたぁ♪♪行こっか☆」

と、私と看護婦さんも、病室を後にした。

第九話【突然】

翌日、私はベッドで横になりながら音楽を聴きながら、翔…君のことを考えてた。

あの時…何て言おうとしてたのかなぁ。。。

・・・・・はぁ。

今から…翔君（翔君って言いづらいっ）の病室行ってもいいかな。。。

でも迷惑かも。。。

でもちょっとだけなら…いいよね？

――――――あれ…？

気がついたら、私は病室を出て、隣の病室の前へと来ていた。

どうしよーっ。。。来ちゃったよ。

今寝てる？寝てたら起こしたら悪いかも。。。でも寝顔…見てみたい。。。

行こうかな。…どーしよおっ！！あ～…でも…そうだ！

3・2・1で開けよっ！

3…

2…

い――――ガララララ

「うぱあああっ！」

「っ……」

待って…なんで出てくんのぉ！？

まだ3秒数えてねぇしっ…めちゃくちゃ驚いてんじゃんっ。。。

しかも変な声でたしっ！！！

「ご…ごめん…驚いた…よね？」

「いや…驚いたけど…ちょっと引いたわ。」

引かれたっ…

「何で…引くの…？」

やっぱい。今絶対私顔真っ赤だぁ。。。

「『うぱぁっ』って…」

「う…。」

「馬鹿みたいな声…っプククク…」

笑われたっ…しかも馬鹿みたいな声って…最悪。。。

私が落ち込んでいると…

「嘘。ちょっとからかっただけだって。」

「本当はそう思ってたくせに。。。」

「思ってねぇよ。」

「じゃぁ、１００パーセント違うっていえる？」
「言えない。」
…言えないのかいっ
「もーいいっ…」
「…てゆうか何か用あった？」
「…？」
「この病室開けようとしてたじゃん。」
「いやっ…昨日の事…聞こうかなって。。。」
「昨日？」
「何か言おうとしてたじゃん。。。」
「あ～…あれか。」
「何…なの？」
「とりあえず俺の病室入れ。」
「は…はぃ。」

翔…君の病室に入った。自分の病室と全く変わらない部屋。
でも、かすかに、翔君の匂いがした。
私はボーッと立ち尽くしていた。何だか、この部屋…落ち着く。。。
「……怜奈？」
突然視界に翔君が入ってきた。
「わぁっ！？」
「何ボーっとしてんの？」
「いや…ぇーとっ…てゆぅか呼び捨て！？」
「だってちゃん付けしたらきもいじゃん」
「ぇー。。。そう？」

「……怜奈ちゃん」

顔がボッっと熱くなった。

「……確かに…きもちわるい…ですネ。」

「だろ？」

違う意味で気持ち悪いよっ

「じゃぁ、私も、翔って呼んでいい！？」

「好きにすれば？」

「じゃー…翔っ！」

一瞬だけど、翔の顔が真っ赤になったような気がした。

「……」

「あーっ！照れてる！？照れてる！？」

「っせぇ！てれてねぇっ」

翔は耳まで真っ赤になっていった。

「ひゃーっ！超真っ赤っ！かーわいーーーっ！」

「～～～～っ」

「しょーーうっ！翔～～っ！翔くーーんっ♪♪」

「やめろってっ！」

「やだ～♪たーーのしーーもん♪♪」

めちゃくちゃ私ハイテンションなんだけど。。。壊れた～…やっば～い。。。

いつもの私何処行った？

「んのやろー…」

翔は、ちょっと低い声でそういい、ベッドに腰を下ろした。

「テレながら怒られたって怖くないしぃっ♪」

私も続いてベッドに腰を下ろす。

「……。」

「…あれ？」

黙り込んじゃったし。。。泣いた？

なわけない…よね？

「……翔…？」

「…あ～…やっべ…」

「は…？」

何が…？

「……」

翔は、黙ったまま、ベッドに腰を降ろしてる私の肩を抱き寄せた。

そのまま、唇と唇が重なった。

…あれ…？

これって……キス……！？

第十話【恋愛感情】

「まーーーじーーーでぇーーーっ！？」

「うるさいっ！」

今日は、珍しく椿と亜矢が来た。

「本当にぃ！？怜奈がっ！？うっそぉ！」

今、さっきのキス…のことを、二人に話したのだ。

「だからぁ、うらさいってっ」

「…スマン。」

「……」

いきなりそう言われると困るっ…

「怜奈がぁ～…私の怜奈がぁぁぁ…」

「私のって…」

椿が超ハイテンション？だ。ハイテンションっていうか、興奮してるって言うのかなぁ。。。

突然、亜矢が言う。

「そういえば、怜奈、それってファーストキスじゃないのぉ？」

「あ…そういえば…」

・・・・・・

「怜奈…ファーストキス…なの？高３で？」

「仕方ないじゃん。私こう見えても純粋乙女だもん（笑）」

「怜奈がっ！？ファーストキス！？しかも純粋乙女って…アハハハハハッ」

「だからうるさいっての！」

「だって…純粋…はは…あははっ」

椿が、完全に壊れちゃった。

いつもはあんなに大人っぽいのに。。。

「だったら亜矢は～？…」

「え～？私もうファーストキスは済ませてるよっ！」

「ッ……仲間って思ってたのに…」

「う…ごめん怜奈ぁ～…」

「いーよいーよ、もう、亜矢はかわいいねぇ。。。」
椿はまだ、ケラケラと笑ってる。
何がおもしろいのやら。。。
「あっ、そーだ、怜奈ぁ。」
やっと椿の笑いが止まってきた時、亜矢が言った。
「何ー？」
「卒業旅行の事なんだけど～…」
「あー、そういえば先生に言っておいてって言われたねぇ。」
「えっ…卒業旅行…？」
「怜奈、行けるんだって！旅行！」
「本当！？」
「何か、最後の思――――――フガッ」
椿が、突然亜矢の口を押さえて、亜矢に何か言った。
「高校生最後の思い出にって！」
「へぇ～。。。」
……『何か、最後の思――――』

その後、きっと私が死んじゃうから、そのための最後の思い出…なんだろうな。

ハァ～……

「そーいえば！」

「？」

「その、キスされた後！どうなったの！？」

「…そのまま…」

「うん…」

「病室でた。」

「……へぇ。」

「そ…そんだけ！？」

「怜奈こそ、そんだけかよぉっ！」

「う……仕方ないじゃんっ…」

「え～、でもさぁ、そのまま…あっ…」

「ん？」

「もうすぐ撮影の時間じゃんっ！やっぱ！…今月の雑誌も買ってよね！」

宣伝？

「はいはい。」

「じゃぁ、私も帰ろ～」

「ん～…」

「ば～いばいっ☆」

「ばいば～い！！」

「じゃぁね～！！」

と、二人は、帰っていった。

二人と入れ替わるように、お母さんが入ってきた。

「やっほ～！元気～？今の…椿ちゃんと亜矢ちゃんよね？椿ちゃん、背高くなったわねぇ。。。」

来てからそうそうよく話すねぇ…

そうして、いつもみたいに、時がたった。

お母さんは、りんごをむいて、一時して帰っていった。

それから…ずっと、翔の事を考えてた。

私…もしかして、翔の事…好きかも。

第十一話【告白】

「あ～ぁ。。。」

やばぃ。…暇だぁ。。。

さすが真昼とあって、楽しそうな番組一つもない。

雑誌も、もう何回も読んだし、漫画もないしっ。

でも翔には…会えなってばぁ。。。

誰か来ないかなぁ。

お母さんもお父さんも仕事だし。。。

その時、??と、ドアをたたく音。

「怜奈ちゃ～ん、入っていい??」

「ど～ぞ～っ」

入ってきたのは、いつかの看護婦さん。

「あっ!ちょうど良かったぁ。暇なんです～(泣)」

「ふふ～、元気ねぇ～」

「ねぇ、看護婦さんて、何歳なんですか?」

「私？」

「うんっ」

「……２０歳～」

「嘘だぁ」

「……やっぱばれるよね～。。。何歳でしょ～か？」

「……３０歳！」

「失礼なっ！私まだ２６です～っ」

「え～、嘘だぁっ」

「嘘じゃない！これは本当！」

「……結婚は？」

「それがねぇ、最近決まったのよ～」

「何が？？」

「婚約？」

「ふぅ～ん。。。」

私、結婚できずに死ぬんだろうな。。。

あぁ～。。。

「怜奈ちゃんは？」

「え？」

「な～にとぼけてんの～？？彼氏のことだよっ♪」

「いっ……ない…です…」

「じゃぁ～、隣の翔君は？？」

看護婦さんがニヤニヤしながら聞いてきた。

「えっ……や、翔は…」

「ふふふ。。。」

「もぅ…看護婦さんっ」

「看護婦さんじゃなくて、中沼でいいわよ～」

「え…中沼…さん？」

中沼さんは、ニッコリと笑うと、「じゃぁ、またくるね」と言って、病室を去った。

私が、音楽を聴きながら、またウトウトとしていると、また誰か、入ってきた。

ガララララっ
「あ、中沼さん…？」
耳からイヤホンを外した。
入ってきたのは…
「しょ…翔！？」
翔だった。

「……あのさ、昨日…」
「……」
「いきなり、ごめんな。」
「えっ……いいよ、別にっ」
何で謝るのぉ！？絶対今、顔真っ赤だぁ。。。
そう思いながら、少しうつむいてた……ら、いきなり、翔が、私のほっぺたをつねったのだ。
「って、何！？も～…」
翔は、少し笑みを浮かべて、
「やっぱお前はこうでなくちゃな。」

「はい？」

「何でもない。」

「何それっ」

あぁ。…やっぱり私、翔のこと、好きなんだ。

「なぁ、お前さ。」

「ん～？」

突然翔が口を開いた。

「……ほんとに、馬鹿だよな。」

「は！？」

「じゃぁ、俺、そろそろ行くわ。」

「ちょっ…馬鹿って何がっ！？」

「じゃっ」

「しょ…翔ってばぁっ！」

「…きだよ」

ドアの近くで立ち止まり、振り返った。

「…は？何ていった？

「俺、怜奈のこと、すきだからっ！」

そういって、翔は、病室を出て行った。

って…え…？

まて。。。ちょっと…

……はぁぁぁ！？

第十二話【卒業旅行】

翔からの、キス。
翔からの、告白。。。
うぅぅぅぅ……

あっというまに、三日がたった。
そして、いよいよ明日は…卒業旅行。
担当の先生の矢島先生がついてくるらしいけど…中沼さんも一緒が良かったなぁ。。。
でも、このまま行くのもなんだしなぁ。。。
あ、矢島先生ってのは、４０～５０代くらいの女の人。っていうか、私の担当の先生。
私が入院して、約二週間が経った。
まだ寿命の3分の一もたっていないけど、でも、私が死んじゃう「時」は、刻々と迫っていた。
最後に、恋愛の一つや二つ…してみたいし。
そうだ、手紙を書いて、中沼さんに渡してもらおっかな。
あ～、でも、からかわれそう。。。

自分で言いに行くしかないのかなぁ。。。

…そうだっ！自分でこっそり渡せばいいんだ！

…でも、こっそりって…

やっぱ。仕方ないけど、中沼さんに頼むか。。。

………翔へ……

って、何て書けばいいんだよぉっ！

え～…と…そうだな。。。うん、うん…

――――――――――――――20分経過――――――――――――――――――

できたぁ！できたぞ、よっしゃ！じゃぁ、あとは、中沼さんを待ってれば…

？？…　「怜奈ちゃ～んっ、入るわよ～♪」

中沼さんだっ！ナイス！グッドタイミングっ！

「昼食だよ～」

ガララララララ…

「お？何書いてんのかなぁ？？」

「わっ…」

手紙を取り上げた。

「あ、だめだめだめ～っ！」

「あらららららららら？？え～と、『翔君へ、　前の事だけど…』」

「ぎゃぁぁぁぁっ！！」

バッッッ！

やっとのことで、取り返した。

「こら、病室では静かにっ！」

「だ、だって、中沼さんのせいでしょぉ～っ！！！」

「うふふふふ、さぁ、怜奈ちゃん。白状しなさいっ！…前の事って、何なのかなぁ？？？？」

「うぅぅぅぅっ……」

「まぁ、いいわ。いつか分かるかもだしっ♪」

「・・・・・・・・・・・」

何なんだろうなぁ、中沼さんて。何だか、一緒にいると、元気が沸いてきた。

「さぁ、昼飯っ！！食え食えっ！」

「…ねぇ、中沼さん。。。」

「何～？」

「この手紙、翔に渡してくれませんか～？？」

「ほほほ、お安いごようよ♪」

「本当！？」

ニッコリとうなずく中沼さん。

そんな中沼さんに、私も微笑んだ。

――――――――――――あっという間に、もう翌日だ。

今日は、出発の日。病室で、中沼さんと話していた。

「そか、今日からなのね。楽しんできてね♪」

「はいっ♪中沼さんも、お仕事がんばって！」

「はいはい。言われなくてもっ！……待って、怜奈ちゃん。」

「へ？」

「実はね、昨日、翔君に、伝言頼まれたの。」

「伝言！？」

翔から！？何で！？

「そ♪まだ、時間あるわよね？」

「はいっ、あと３０分くらいなら…」

「『裏庭で待ってる』だって？」

「えっ！？」

「行っておいで！！」

「は、はい！！」

急いで、病室をでる。
発作が起きないように、走らないで、早歩き。…なんて、できるかっ！
いつの間にか、気をつけていたのに、走り出していた。
――――――――――――――「翔っ！！！」
翔が、驚いた顔で、人がまったくいない中のベンチに座っていた。
「おま…っ、何で走ってるんだよ！？」
「ごめ…ゲホ、ゲホっ…」
「…大丈夫か？」
「う…うん…」
はぁ、はぁと、息を切らしながら、答える。
やっと落ち着いてきた。ベンチに座って、その隣に翔が腰を下ろした。
「……翔、あのね。私ね、手紙でも、書いてたんだけどね。私もね、翔の事…好きだよ…っ」

翔は、ふと笑った。
そして、ポケットから、何かを取り出した。
腕時計だった。
「これ、俺の。」
「…は？」
「お前が、旅行に行ってる間、これお前にやる。」
「え…でも…」
「もっていけよ、お守り。」
翔は、私の腕を取って、腕時計をつけてくれた。
「…ありがと。…じゃぁ、私もっ！」
「え～と…」といいながら、何か渡せるようなものを探した。
でも、結局みつからなくて、前髪を止めてた棒ピンを渡した。
「これかよっ」
「だ、だって、それしかないんだもんっ！」

「…分かった、大事にとっておく。」

「へへっ♪」

何だろ、これ。

結婚指輪の交換みたいな気持ち。

…「あぁぁっ！もうこんな時間！！あと5分しかないじゃん～～っ！」

もうかよぉ～！！

「えっと、じゃぁ、行ってくるねっ！」

ベンチから立とうとした私の腕を、翔がグイッと、引っ張った。

「へ……」

そのまま、翔の唇と私の唇が重なった。

二回目の、キス――――――。

ゆっくりと、二人の唇が離れていく。

「……っ」

まだ、ここにいたい…。

翔が、トンっと、背中を押した。

「いってらっしゃい。」

満面の笑みを浮かべていた。

私も、それに負けないくらい、笑った。

「いってきますっ」

――――――――「怜奈ちゃんっ！早く早くっ！」

もうすでに、タクシーが到着していた。

矢島先生が、荷物をもって待っていた。

「わ～～っ、ごめんなさ～いっ…」

バタンッと、ドアがしまった。

腕時計を見ながら、昨日書いた手紙の内容を思い出していた。

『翔へ。

前の事だけど、うまくいえないけど…私も、翔の事が、すきです。
明日から、卒業旅行なので、５日間いないのです。。。
もしかしたら、発作とかで、早めに帰ってくるかも。
お土産買うね♪待っててよっ！

怜奈』

ちょっとした好奇心を押さえて、タクシーは、出発した。

第十三話【香織と松井】

「ぎゃぁぁっ！」
「怜奈だよぉぉっ！！」
「大丈夫なの～！？」
「死んでない？？？」
「血吐いてビックリしたんだよぉ～っ」
私が高校の門をくぐると同時に、たくさんの人が話しかけてきた。
「うん、今のところは、へーキィ♪」
「怜奈ぁぁぁぁっ！」
振り返ると、いつもと変わらない、椿&亜矢。
二人がこっちに向かって走っている。
大声を出せないから、思いっきり手を振った。
出そうな涙を、冷たい2月の風が、乾かしてくれた。
この旅行だけは、楽しく過ごしたい。
なんてったって、みんなとの「最後」の思い出だから。

「おっはよぉ♪」

「おはよー、亜矢ぁ♪」

「怜奈、大丈夫なの？」

「うん、担当医さん来てるし、今のところ、絶好調☆」

「…例の翔君はぁぁ？？」

「ぅ……」

「心配するな、飛行機の中でゆっっっっっっっくり聞いてあげる？」

「はぁ・・・」

あ、そういえば、慎は…？？

あたりを見回してみる。

あ、居た……

っていうか、何だ、あの顔～…

口をあけながら呆然として、こっちを見ている…

何で来ているんだってかぁ！？

来ちゃ悪いのぉ！？

すると、私が見ているのに気づいたのか、口を閉じて、驚いた。

舌をベェっと出して、怒ったフリをすると、慎は、顔を突然真っ赤にして、反対の方を向いた。

…何？あいつ～…

「もぉ、怜奈ちゃんは鈍感ですなぁ…」

突然、椿が耳のそばで、小声でささやいた。

ビックリして、ちょっと後ずさる。

「へ…？な、何が…？」

「ずばりっ！」

「「慎は怜奈が好きなのだぁぁっ！」」

亜矢と椿が声をそろえて言った…

ナイスコンビネーション…

じゃなくて、

「はぁっ！？な、ないないないないないないないないないない！！！」

「あるあるあるある！そうだっ！絶対そうだ！」

「違う違うっ！」

「違ってないっ！」

「な、そんな…ありえない・・・」

「ありえるっ！」

「む、ムリムリムリムリムリ！」

「…それ、ある意味慎にひどいよ…？」

「ぅ…」

「でも、まぁ、怜奈には愛しの翔君がいるしね～」

「うるさいっ／／／／／」

そして、3人で、笑った。

「バスに乗りなさーーいっ！」

先生の声が響く。

みんなが、荷物を持って、バスへと歩き始めた。

私も、みんなの波にのまれながら、バスの席のプリントを開いた。

私のバスの席はぁ～……げっ、慎じゃん。。。

気まずいよぉ～…

前の席は…海斗と、咲…

少し、心臓がズキンとする。

後ろは…あ、香織と松井だぁ♪

いきなり、隣から誰かの声。

「怜奈ちゃん、一緒に話そうね！」

香織ってのは、淺川（あさかわ）　香織（かおり）。

頭良い秀才ちゃんで、大人しくて、かわいい子！！

「うん、いいよぉ♪」

一緒にバスに乗り込んだ。

「あれ？みんな席変わってない・・・？」

そういえば、椿も前の人と席変わってる～…

「わ、ホントだぁ・・・。」

そうだ！いいこと思いついた☆

「…じゃぁ、松井、私の席座れ！」

これで慎の隣を逃れる～…

「はぁ～？なんでだよ？」

「い～からっ！そんなに香織の隣がいいのぉ？？…あ、もしかして…？」

「違っ…」

松井の顔が赤くなる。

松井ってのは、松井（まつい）　智希（ともき）。

まぁ…ごく普通の男子高生。

ちょっと素直な男子かな…？

「おぉ、図星かぃ？？」

ニヤニヤと松井をつつく。

「ちげーって言ってんだろぉ！？分かったよ、お前の席に座る！淺

川の隣とか、座りたくねぇ！」

「え……」

香織が落ち込んだ…

「ちょ…香織ぃ、大丈夫？…あ～ぁ、松井～…」

「え、いや…あ、淺川…ごめんな……？」

「……」

香織はすっかり超ブルー…

松井も少し落ち込んだ。

「香織、席つこう！！」

「…うん…」

二人で、席に着いた。

前では、慎が松井に何か問いかけてる。。。

かすかに、「振られたか・・・」とか、聞こえてくる。

慎、何を勘違いしてんだか…

「香織、元気出してって！」

「でも…私の隣…座りたくないって…私、実は…松井君のこと、好

きだったのに…」

ほほぉ！！？？まじかい、こりゃあっ！

よっしゃ、私がキューピッドになってやる…

「あら、メールだぁ♪」

ホントはメールなんて来ていない。

返信するフリをしながら、松井にメールを打つ。

『松井ぃ！香織、相当落ち込んでるよっ！？誤れ！そして、告っちゃえ♪』

ピピピッっと、送信。

すぐ、返事は返ってきた。

『誤っといて』

はぁぁぁぁぁぁぁ！？

何だこいつぅ！？

…そーだぁ♪

『香織が、今日の自由時間、ホテルの玄関辺りで待ってるから、来てって！』

送信☆

お次はぁ…

「香織っ！」

「何～？」

「松井から、メールで、今日の自由時間、ホテルの玄関辺りで、待ってるって♪」

「…え？」

「がんばれっ！松井、告白してくるかもだよぉ？？」

「…ないってば…」

ふっふっふ…香織、顔真っ赤…♪

かわいーんだから、香織はぁ♪

よっしゃ、これで、松井か香織が告れば…？

…返事が来た。

『分かった、絶対行くって、淺川に言って。』

ほほほほほほ♪

『了解っ♪告白しろよ、絶対！！』

送信☆☆☆

それ以来、返信は、来なかった。

「ねぇ、怜奈ちゃん…」

「へぃ！？」

「…あの、血吐いたのなんだけど…」

あ、病気の事…忘れてた…

「あぁ～…病気！」

「病気…？」

「実は～…ガンなんだぁ…」

「…え？」

香織が絶句する…

「まぁまぁまぁまぁ、気にしないで！」

「え…え・・・？」

「そういえばね、私、彼氏できたんだよぉ♪」

「え…え…え……？」

香織はもう混乱状態。

…あっ、しまった。慎に聞こえてたかも…

ちらっと前を見る。どうやら聞こえてないらしい。。。

「よかったぁ…」

「え…何が…？」

「だからぁ、病気の事は、もう忘れていいよっ！」

「あ…う、うん…？」

「もぉ、香織ぃ！？」

「あっ、え…う、うんっ！わ、分かった！消します！」

そんな香織に私は少し笑った。

さてさて、今日の自由時間後が楽しみだぁ♪

第十四話【旅行、最終日】（前書き）

あ、この話で、磯ってでてくるけど、分からない人のために…

磯ってのは…浜辺の種類？で、岩石の多い、海・湖などの波打ち際の事です。

第十四話【旅行、最終日】

その後、バスは航空に到着して、飛行機の中では、椿と亜矢に、翔について思いっきり喋らされた。

ホテルについて、なんだかいろいろとあって、昼食後、自由時間。

ホテルは、ビックリな事に、海の近く……

といっても、浜辺ではなく、磯だった。

椿と亜矢と、いろいろな所を回った。

自由時間が終わって、少し担当の先生のところへ。

異常はないらしくて、薬を飲んだ。

その後、香織のところへ。

どうやら…付き合うことになったらしぃぃ??

あ〜…自分の事じゃないのに…嬉しいよぉ♪

応援してるよ。

その日の夜、病気とかの事で、少し泣いたのは、私だけの秘密…

翔元気かなぁ…?

そう思って、翔の腕時計を、ギュッと握った。

そんな調子で、旅行はあっというまに過ぎていった。
そして、とうとう最終日の事だった。みんなが乗馬体験をしてる時。
私は、病気のせいで、乗馬はできなかった。
ホテルの部屋で、一人、窓から外を見つめていた。
天気はあいにく曇りで、今にも雨が降りそう…
っていうか、風強いし、海の波が強いし…
絶対乗馬中止になるな、こりゃ…
その時…ドアが突然開いた…。
誰だろう…？
みんな、乗馬に行っているはず…
入ってきたのは…
「咲…」
そう、あの、咲だった…
「何…？」
「…あんた、旅行のとき、いっつもこの腕時計してるよね？」
咲の手にあったのは…翔の、腕時計…

いつのまにか、私の手から、腕時計が消えていた。
「何で、持ってるの！？」
「昨日の夜、寝ているときに取った。」
「か、返してよっ！それ、大事なものなの…っ！！」
「…へぇ、大事なものなんだぁ？」
「…っ！？」
「私さ、あんたの事、嫌いなんだよね？」
「…だから、何なの？」
「うざいし、調子のってるし。」
調子のってんのは、そっちの方だろぉぉ！？
咲が、歩いて、私の隣に来た。
そして、窓を開けた。
いつの間にか、外は、雨が降っていた。
冷たい風が部屋の中に広がる。
ビュウゥゥゥ…と、大風が吹いた。海の波がさらに大きくなる。

冷たい雨が、頬をたたく。雨っていうか、雪…？

「その腕時計、返してよ…！」

咲は、腕時計を持った腕を、大きく振り上げた…

「だ、だめってばっ！」

私が立ち上がった。

ビュンッ！！

咲が、腕時計を投げた。

激しく荒れた海の中に、腕時計が消えた。

「な…」

私が、窓の前で立ち尽くしているのを、咲はにらむように見て、ニヤリと笑うと部屋を出て行った。

翔の…腕時計が…

海…の…中に…

私は、知らないうちに、走り出していた。。。

「怜奈ちゃん！？」

ホテルのホールで、担当医の矢島先生が呼ぶ。

その声にも気づかず、私ははだしのまま、外へと飛び出した…。

あの辺…！？

じっくりと、海のほうを見つめた。

見えないよっ！

「……っゲホ、ゴホっ…」

腕時計が…っ

また、走りだした。

ごつごつした岩に気をつけながら、びしょぬれになりながら、腕時計を探した。

その時、何かが光ったような感じがした。

あ、あれ！！腕時計だっ！急いで、腕時計を拾い上げた。

良かった……っ！

早く、もどらなきゃ…

「――――――っ…ゲホっ！ゴホッ、ゴホッ…」

やば…きつい…

行かなきゃ…っ

その時――――――――――――――

ザパァァァァンッ！！！

「……っ！！？？」

大きな波が、怜奈を包んだ。

第十五話【喧嘩】

「せんせーっ！」

職員用のホテルの部屋。

亜矢と椿が、二人で慌てて先生を呼んでいた。

「何？今日の乗馬体験は…」

「ちがいますっ！」

「れ…白井さんが、いないんですけどっ！？」

「…どこかに、いるんじゃないんですか？」

先生が、そんなこといちいち聞くなって顔で、答えた。

「ち、違うんです～…怜奈の…えーと、白井さんの…怜奈ちゃんの担当医さんに聞いたら、『飛び出しちゃった』って…『探して』って言われたんです～っ」

「じゃぁ、探してきなさいよ…」

――――――――「もぉぉっ！何なんだぁ、あの先生はぁぁっ！」

亜矢が怒っている。

「いいじゃん、もうっ！探そ！」

そこに通りかかったのは、慎。

「あ、いいところに来たっ♪」

「ねぇ、林田っ！怜奈知らない！？」

「…はあ？白井？…知らねぇけど」

「怜奈がいないのぉ～っ！」

「もしかしたら、外で発作起こして倒れてるかも…」

「…はあ…？」

「だからぁ…っ」

「何してんだよっ！？とっとと探せよっ！？」

慎が走り出す。

「…さすが、男…」

「じゃなくて、探そう！怜奈！！」

亜矢と椿も、外へと駆け出した。

――――――――――――「あ、あそこ！！」

そこは、ちょうどホテルの裏辺りの、磯部。

何か、影が見え隠れしている。

慎が真っ先に走り出す。

「白井っ！」

怜奈が倒れてた水は、かすかに赤色に染まっていた。

「れ、怜奈っ…」

はぁ、はぁ…と、亜矢と椿の息切れの音も、雨の音にかき消された。

「白井っ！白井！」

眉をピクリとも動かさない…

「怜奈…まさか、死――――――」

「行くぞ！」

慎が、怜奈を背負って、走り出した。

ポト、と何かが落ちた。

腕時計…

その腕時計を拾って、椿と亜矢も、慎を追った。

ホテルの近くの〇〇〇病院に、怜奈は運ばれた…

ピッ―ピッ―ピッ―ピッ―ピッ―ピッ―ピッ―ピッ―ピッ―ピッ―……

「―――心肺停止！！」

「心肺蘇生法開始しますっ！」

「怜奈ぁっ！」

ドアの外から、椿が叫んだ。

カーテンが閉められた。

「怜奈…っ」

直後。

みんなの後ろから、一人の声。

「…あいつ、本当に海行ったんだ？」

「咲…」

咲が、慎と椿と、亜矢の後ろに立っていた。

その顔は、ちょっと青ざめていた…。

「…あんたの…せい、なんでしょ？」

椿が、言う。

「…そうだよ？でも、私は、怜奈の持っていた腕時計を、窓から投げただけだし…」

「怜奈がもし死んだら、あんたが殺したんだよ…？」

「…私が、殺したんじゃないもん。」

慎は、その場で、うつむいていた。

亜矢は、体を震わせて、声をださずに泣いていた。

「あんた、いい加減にしてよ！」
椿が、震えた声で叫ぶ。
「…私だって、少しくらい反省して――――――」
「少しくらい、じゃねぇんだよっ！」
「！？」
椿と咲が、声のした方へ顔を向けた。
二人の目線の先には、亜矢…

「お前、どんだけ怜奈を傷つけたら気がすむんだよっ！？怜奈が、この２週間、どんだけ泣いたか、知ってんの！？」
「何言って…」
「…亜矢…？」
亜矢の普段のおっとりからは見られない、表情。
怒りで体を震わせて、涙をぼろぼろ流しながら、怒っていた。
「私だって、ちゃんと今は、怜奈の事、分かるように…」

咲が、亜矢を見て驚きながら言う。
咲の目には、うっすらと涙が浮かんでいた。
「『今は』って何!?お前に、怜奈の何が分かるんだよ!?」
亜矢はそう言って、泣き出した。
「亜矢…」
椿が、亜矢の近くに寄り添った。
咲は、亜矢と椿を見ながら、涙をぼろぼろ流していた。

第十六話【目覚め】

うふふふふ・・・あはははは・・・

こう笑いながら、空から二つの光が落ちてくる…

天使だぁ…

「怜奈ちゃん、あなたを向かえにきましたー！」

そっか・・・私・・・死んじゃったのかー・・・

天国って楽しいのかなぁー・・・

「さぁ、行こう！」

「いきましょう！」

うふふふふ・・・あはははは・・・

と、また天使が笑い出す・・・

――え？

バッと布団から顔を出す。

ゆ…夢…？

い、生きてる…？

ふと、手に感触が…

翔…だ・・・
…寝てる…？…カワイー…
…てか、何でだ…？
何だか、よく寝る前の事を覚えてないぞ…
「…怜奈…？」
お…
翔が、ムクっと体を起こした。
「しょ、翔…？起こしちゃった？ごめ――――――」
ギュ、と私を抱きしめる翔。
「え、ちょっ…しょ、翔…？」
「てめー、いきなり死に掛けやがって…」
「はい？」
何！？何何何！！？？
直後、ゴツンと、頭に衝撃が走った。
「あたっ・・・」
翔が、頭突きしてきたのだ…
「な、何ぃ？も～～…」

「おめー、覚えてねぇのかよ。。。」

「だ、だって…」

「3日眠ってたんだよ??」

「み、三日も!?」

「しかも、海に落ちてたって…」

う、海…?

そ、そーいえば、私、卒業旅行で…

咲に腕時計…

「あ、あぁ!!…う、腕時計は!?」

「もう持ってる」

「…へ?な、何で・・・?」

「何だっけ?椿とかいう二人組が、渡しに来たけど?」

「あ、あぁ、椿と亜矢かぁ・・・」

その時…

ガララララ、とドアが開く。

「あら、翔君、また来て…て、怜奈！？」

「あ、お、おはよ～、マミー…」

お母さんが、部屋に入ってきた。が、またドアを閉めて、出て行った。

「・・・？・・・？」

そして、またドアが開いた。

「れ、怜奈ぁ！！」

な、何がしたかったの！？

「ど、どうしようっ！あ、お父さんに連絡しなきゃっ！」

まるで、赤ちゃんが生まれたかのように、はしゃぐお母さん。

翔は、一息つくと、「じゃーな」と言って、部屋を出て行った。

「…はぁ」

三日も…無駄にしちゃった。

「寿命」というのは、私を待たずに、刻々と時を刻んでいた。

第十七話【平凡】

あーぁ、出かけたいなぁ・・・

暖かい昼下がり。
もうすぐ、卒業式。

卒業旅行の事件で、目をさました二日後。

なんか、だるー・・・

「はぁぁ…」

たくさん死ぬほど寝たから、眠たくないし、何もすることないし。。
翔は何してんだろ。。

「あーぁ・・・」
と、そっと目をつぶった。

「何？暇なの？？」

ガバッ、と目を開き、右を見た。

「しょ、翔・・・？」

あ、あせったぁ・・・ビビったぁ・・・

右には、いつの間にか、笑ってる翔の姿。

「な、え？い、いつの間に・・・？」

「こっそり入ってきた」

「・・・へぇ・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

何か喋れよっ！めちゃくちゃ気まずいじゃんかぁ！！

そして、やっと翔が口を開いた。

「あのさぁ・・・」

ガララララッ

と、入ってきたのは・・・

亜矢と椿だ。。

「怜奈ぁぁ！どうしよぉぉぉ！」

「あ、もしかして、おじゃまだった？？」

ニヤニヤしている椿と、何か相当なショックを受けている亜矢。

「あ、いーよ。じゃぁ、俺帰るな。また来る。」

と、ドアの方へ歩いてく翔。

椿と亜矢に、ちょっと笑って、部屋を去っていった。

「怜奈怜奈怜奈ぁあ！」
「どーしたの？亜矢ー？」
「ごめんねぇぇっ！！」
「はぃ？？」

「実はね。。。」

亜矢が一度涙を拭(ぬぐ)ってこう言った。

「私、翔君のコト、好きになっちゃったかもなんだよぉぉぉっ」
「・・・・え？」

わぁぁぁん、と私に抱きつく亜矢。

「えーと、あ、亜矢サン？？」

翔の事・・・好きになっちゃったかもって・・・・

・・・マジですか？

「ていうか、普通言う？」
「・・へ？」
「好きになっちゃったかも、何てライバルに適する人に言う・・・？」
「う、うん。。え？な、何が？」
「だーかーらぁっ、そうなったら、私と亜矢はライバルなんだってばぁ」

もーやだこの子。。

「え、ら、ライバルいやだぁ。。」
「まぁ、言うと思ったぁ・・」
「じゃ、じゃぁ、今言ったのナシってコトは！？」
「無理無理。。」
「じゃぁ、私今から死ぬっ！」
「何でっ！？ダメダメダメーーっ！」
「じゃぁ、・・・ふ、フラれてくる！」
猛だっしゅで病室を出てく亜矢。
それを、慌てて椿と一緒に追う。

――――――ガララララッ
「翔さんっ！私をふってくだ――――――フガッ」
危機一髪で、亜矢の口を押さえる。
「な、何でもないよー？」
と、必死の笑みを翔に見せた。
はぁ？という感じの顔で、私達3人を見つめる。。
「し、失礼しましたぁっ！」
ガララララッ・・・
「もー、亜矢ってばぁ…ダメでしょー！？」
「・・・き、嫌いになった・・・」
「・・え？」

亜矢が、口をポカン、と開け、ボー然としてる。。

「翔君の事、嫌いになれた・・・！」

「な、何で・・・？」

「エロ本読んでた。。。」

「・・・へぇ。。」

アトデ殺ス？？？

と、こうして、一件落着に終わったのでした。。

第十八話【初デート】

「ねぇ、抜け出さない？」

――――――――――――――へ？？？

その一言を言われたのは、いつもどおりの普通の日。

「え？何が？何を？何処へ？どれが？なぜに？？」

「や、だから、俺と怜奈で、病院抜け出して、街探検しないか、て・・・」

「え？？？？？？？？？？？？？」

病院抜け出して、二人で街をデート！？！？

そんなの・・・・

「いいねそれっ！！！！行きたい！！！！！」

「だろ？」

「うんうんうんうんっっっ」

ちょっと考えたことはあったけど、まさか翔から言ってくれるとは・・・・！

やったぁぁっ！

「いついつ！？！？」

「・・・・今から♪」

「今！？」

えー・・・今かぁ・・・

「・・・いーよ！！！！！行こ！」

「え、いーのかよ」

「え？だめなの？？」

「や、いーけど・・・」

「じゃ、行こうってば！」

「えええええ・・・・・」

「もー、何っ！？さっきからぁ！！」

「何でも…ない…です。。。」

街・・・・ということは、初デート、って事だよね・・・？

初デートかぁ♪

楽しみー♪

――――――――「あら？怜奈ちゃん？何？そんなにオシャレしちゃってー♪抜け出そうなんて、考えてないわよね・・・・？」

と、中沼さん。。。（（ここの看護師）

笑顔の怒り・・・・・・・・・・

ひいいいいいいっ、鋭いっ！！！！

「や、やーだなぁ、そんな、中沼さん・・・・抜け出すなんて・・・」

「ふーん・・・・？そーなの？？」

「は、はい・・・・・・・」

か、顔がひきつっちゃうよぉおぉっ

「中沼さーんっ、ちょっとー」
「あ、はーい」
と、あっちに行く中沼さん。。
ほっ、よかったぁ・・・・・・・
えーと、中庭で集合だよね・・・・・♪
と、中庭へと急いだ。。

――――――――――「おっそーい、翔ー」
「お前が早いんだよ？」
「・・・・・・・・・・え？」
「もーいい、行くよ」
「あ、ちょっ」
と、強引に怜奈の手を引く翔。
翔・・・・・照れてる・・・・・・かーわいっ？
「何ニヤニヤしてんの？」
「えっ、ニヤけてる？」
「・・・・まぁいいや、」
「へへっ♪」
ギュっ、と手を握り返した。

――――――――――「わーーーっ♪久しぶりだぁ♪」
「あんまはしゃぐなよっ」
「了解っ♪」

久しぶりの街は、人が多くて、太陽がまぶしかった・・・・・

「あっ、翔、プリ撮ろーよっ♪」
「・・・・プリ？」
「プリクラっ！！！知らないの！？！？」
「聞いた事はあるけど・・・・しらねーや。」
「写真とって、それがシールになんの！！」
「写真のシール？」
「そ！！！いーから撮ろっ！！」

と、今度は怜奈が強引に翔をプリ機があるお店へ連れて行った・・・・

――――――――――「あーっ、だめだめ翔！！笑って！！」
「笑ってるつもり・・・・」
「笑ってない！！！はい、ニコって・・・・」

パシャッ・・・・

「あー、変になっちゃったじゃんー？」
「あ、次始まるぞ」
「えーと、次のポーズは・・・・じゃ――――」

その時、翔が突然怜奈にキスをおとした・・・・

パシャッ・・・・

「あ、今の最後の一回だった♪セーフだw」
「・・・・・／／／／／／」
「怜奈、テレてんの？？w」
「て、テレてなんかっ・・・・・・テレました・・・・」

い、いいいいい、今のが噂のチュープリ・・・・初めてした・・・・・・・・

どーしよっ、顔が熱いっっっ／／／／／／／／／／／

「あ、次落書き！行こっ、翔！！」

と、落書きコーナーへと移る二人だった・・・・・

――――――――――「あー、喉渇いたなっ」
「ジュース買ってやろーか？」
「うんっ・・・あ、でも、お茶で・・・・・ジュース飲んじゃダメなんだ・・・・」
「りょーかいっ」

と、翔は自動販売機を探しに、街の方へと歩いていった・・・・

「・・・・はぁ・・・・・」

疲れた・・・でも、楽しいな・・・・

今怜奈がいるのは、どこか路地裏のベンチ。

さっき撮ったプリクラを眺めた。

「・・・・」

顔にボッと火がついた。。

チュープリ。。。。。。。。

「ふふっ♪」

と、プリクラをバッグに直してると・・・・・

「まだあるだろぉ？金出せよぉ」

と、男の声が聞こえてくる・・・・

バッ、とそっちの方を向いた。

チャラチャラした男二人が、中学生くらいの男の子をカツアゲしてた・・・

「もう・・・ホントに、ないんです・・・・」

「嘘つくなよぉ！？ささと出せや！！！！！」

「ボコられたいのかテメェ！？」

うっ・・・・かわいそう・・・・・

と、眺めてただけなのに、自然と体が動いてしまう・・・・

「あの・・・・ホントにないって言ってるじゃないですか・・・・やめてあげてくれませんか・・・？」

「あぁ？何だテメ？」

「うっ・・・・あの・・・・ホントに止めないと、警察、呼びますよ・・・？」

ガンッッ

ひぃぃっ・・・・・・

チャラ男が壁を思いっきり蹴った。

「やめろよー、怖がってんじゃん。それにこいつ可愛いし、ちょっと遊んでやろーぜw」

「・・・・・そーだなぁ」

ニヤリ、とチャラ男二人が笑った・・・

ど、どーしよう・・・・・

足がガクガクする・・・・・・

翔・・・・・っ

腕をつかまれた、その時・・・・・・・・・

「おいっ」

と、後ろから聞きなれた声・・・・

「翔・・・・・っ」
「その女に触んなっ」
「あぁ？何だこいつ？」
と、チャラ男が翔の方によっていく・・・・

「翔、ダメだって！！！！！逃げてってば！！！」

しかし、その言葉は翔の耳には届かなかった・・・・

そして、翔がチャラ男を思いっきり蹴った・・・・・

第十九話【悲劇】

「翔・・・・っ」

ガッ、と翔が殴られた。

「やめてっ」

思いっきり翔が蹴られた。

何度も何度も蹴られ、殴られ・・・・・

「やめってってばぁっ！！！！！！」

――――――っ・・・・・こんな時に・・・・・・・発作が・・・・・

喉の奥がキリキリする感じ・・・・

「ゲホッ、ゴホッ・・・」

それでも、叫び続けた・・・

「やめてっ！！お願いだからっ！！」

何度も何度も殴られ、蹴られの翔・・・

もう・・・見てられない・・・・・

「ゴホッ・・・・・」

かすんでく目をこらえて、翔の方を見た。

首を押さえられて・・・・・

翔が・・・・翔が、殺され・・・・・・

「もう二度と俺らにはむかうんじゃねぇぞ？次は殺すからな？」

ガンッ、と最後に殴られて、男二人はどこかへ去っていった・・・・・

「しょ、翔っ・・・・・」

必死に、翔に駆け寄った。

「翔、翔・・・っ」

「お前・・・・ほ・・・発作・・・・・」

「ゴメン・・・っ、ゴメンね・・・っ・・・ケホッ、ゴホッ、・・・・」

「い、いーから・・・・・」

ゲホッ、と血を吐く翔。

そのまま、意識を失ったようだ・・

「翔っ・・・・だめ・・・死なないで・・・・っ」

あ・・・やばいかも・・・・・・

くらくらする・・・

その直後。

「白井っ！」

と、走ってきたのは・・・・・

「慎・・・・？」

「大丈夫かよ！？」

「慎・・・何でここ・・・・・」

「弟に呼ばれた。」

「弟・・・・？」

あぁ、あの、カツアゲされてた男の子か・・・・

「慎・・・翔が・・・どうし・・・・よ・・・・・」

プツリ、と意識が途切れた。

第二十話【私のせいで・・・】

「・・・・・・」

ピッ―ピッ―ピッ―ピッ―ピッ―ピッ―・・

「・・・・・・」

・・・・・病院・・・・・

・・・・あれ・・・・・・・・・??

私・・・・・・・・

街に行った・・・・っけ・・・・

そして・・・・翔・・・・翔が・・・・翔、は・・・・??

翔は!?

ガバッ、とベッドから抜け出す。

窓を見る。外は真っ暗。。

夜、だ。。

翔、お願い、無事でいて――――――!!!

――――――――ガララララッ

「しょっ・・・・・・」

ベッドに、翔はいない。

そんな・・・じゃぁ、どこにいるの・・・・!?

翔の病室を抜け出して、真っ先に向かうは、緊急治療室。

夜、そして病院。

今にもお化けが出そう。。。

いつもなら怖くて歩けないのに・・・

そんなこと、気にしていられない。。

翔・・・・・!!!

どんっ・・・・・・

「ぁたっ・・・・」

「・・・怜奈ちゃん?な、何してるの!?早くベッドに戻りなさい!!」

「な、中沼さん・・・・」

ぶつかったのは、看護師の中沼さん。
夜の見回りらしい。。伝統を持ってる。

「しょ、翔・・・っ翔はどこですか！？」
「・・・翔君、は・・・・・」

中沼さんは、一息ついて、「緊急治療室に入ってるわ・・」と言った。

やっぱり・・・！！

怜奈は立ち上がるとまた走り出した。
胸が、キリキリする。目の前がクラクラする。

それでも、走り続けた。

――――――――――――「翔っ！！！！」

よく見えない・・・けど、なんとか見える。

いろんなチューブをたくさんつけられた翔が、ベッド横になっている。

「翔っ、翔・・・！！」

とたんに涙がボロボロと溢れ出した。。

どうしよう・・・私のせいだ・・・私のせいだ！！
ごめんね、翔・・・

お願い、死なないで・・・

神様、お願いだから・・・なんでもするから・・・

翔を返してください・・・っ

私・・・死んでも・・・いいから・・・・・

その時、プツリと意識が切れた。

第二十一話【ごめんなさい】

「翔っ、翔・・・っ」

ピーーーッ、と心拍数が０になった。。

「翔！！いやだ！！翔っ！！！！！！」

死なないで・・・・っ！！！！

――――――――――ガバッ！！！

「・・・・はぁ、はぁ・・・・・」

ゆ、夢・・・・

夢・・・・だった・・・・

良かった・・・・

時計を見ると、針は昼を指していた。

翔・・・どうなったの・・・・！？

いつの間にか、私は病室のドアの前に立っていた。

ガララララッ、と病室のドアを開け、昨日倒れた場所へ行こうとする。

「怜奈ちゃん!?」

「・・・・中沼さん・・・・」

「だめよ、まだ横になってないと!!」

「でも・・・翔が・・・・!!」

「私が翔君の事教えてあげるから!!!」

「・・・はい・・・」

と、ベッドに横座る。

「ねぇ、中沼さん・・翔は・・・・?」

「・・・・驚かないで聞いてちょうだいね??翔君、今・・・・」

中沼さんは、一瞬悲しそうな顔をして、また口を開いた。

「いつ、死んでも・・・分からない状態なの・・・」

・・・・・・死、ぬ?

翔が??

私じゃなくて??

・・・・私の、せいで??

「そんな・・・そんなの・・・翔に・・・翔に、合わせてっ！！」
「まだ、無理なの・・・」
「・・・・いいっ！！自分で行く！！」
と、病室から抜け出す。
「怜奈ちゃんっ！！」
と、中沼さんの声が聞こえる。
でも、そんなの聞こえなくて、私は真っ先に昨日の緊急治療室へと急いだ。
――――――「あそこ・・・っ」
そこの前には、一人の女性と、男性、そしてお医者さんが話してる。
女性の方は涙がボロボロとあふれてる。。
あれ、きっと、翔のお父さんとお母さん、だ。。
「怜奈ちゃんっ！！！」
と、後ろから中沼さんが追いかけてきた。
その名前に反応するように、翔のお父さんお母さんがこっちを向いた。
そして、つかつかと、お母さんが私に近寄ってきた。
「あなたが・・・白井怜奈、なの・・・？」

翔にそっくりの顔立ちで、美人な人。

「・・・はい・・・私が――――」

とたんに、私の頬を女の人の手のひらが思いっきり叩く。
そして、ぱしんっ、という鈍い音が辺りに響いた。

「あなたがいたからっ、翔がっ――――」
「やめろっ！！」

と、翔のお父さんが助けに入った。

「――――っ・・・っ」

叩かれた頬を押さえながら、そのばにしゃがみこんだ。。

涙がボロボロとあふれてくる。。

「――――なさい・・・っ・・・ごめん・・なさいっ・・・・・」
いつの間にか、私の口からは謝罪の言葉が出ている。

「私がっ・・・私のせいなんですっ・・・ごめ・・ごめんなさい・・・っ・・・」

私のせいで・・・翔が・・・・

気がつくと、私は、その場を後にして、病室へと歩いていた。。
中沼さんも、お母さんも、お父さんも、医者も、何も言わず、追いかけもせず、
ただただ私を見つめていた・・・

――――――フラフラと、病室へと向かう。

そして、目に映ったのは、翔の病室・・・

無意識のうちに、ガラガラと翔の病室のドアを開けていた。

ここで・・・ファーストキスをしたんだっけ・・・？

とても、恥ずかしくて、溶けてしまいそうになって・・・

あぁ、やっぱり私、あの時から翔の事、好きだったんだ。。

ベッドを少し、指の先で撫でるようにさわる。

ここで、翔は、昔から過ごしてたのかな・・・

とたんに涙があふれてきた。

今日一日で、何度泣いたんだろう・・・

私・・・私、これから、どうすればいいの・・・・・??

第二十二話【無】

※中沼さん視点です※

「怜奈ちゃん、お願いだから、食べて??」

コンコンコン、とドアを叩く。

怜奈ちゃんが翔君のお母さんから叩かれた日の翌日。

あの日、怜奈ちゃんは昼食と夕食を食べてない。

今日も朝食を持ってきているけど、食べる気配すらない。

何も一言も喋らず、死んだような、虚(うつ)ろな瞳で、ただずっと窓から空を見上げていた。

怜奈ちゃん・・・お願いだから・・・

「ねぇ、怜奈ちゃん??」

「・・・・・・・・・・」

「怜奈ちゃん、一言でもいいから、喋ってちょうだい??ね??」

「・・・・・・」

「怜奈ちゃん・・・」

それでも、何も変わらず、ボーっと空を見上げてる。

「・・・・ここに、朝食置いておくから・・・お願いだから・・・たべてね??」

そして、病室を出て行った。

――――――――「どーしたのぉ??中沼さぁん??」

話しかけてきたのは、婦長だ。

おしゃべり好きで、ちょっと噂が好きな、優しいおばさん。

「また白井怜奈ちゃん??」

「はい・・・・」

「大変ねぇ・・・まぁ、仕方ないわよ?いつかきっと元気になるわぁ」

「ありがとうございます。。」

そして、エレベーターから誰かが出てきた。

あの子達は、確か、怜奈ちゃんの・・・

「あっ、ちょっと待ってっ!!」

と、女の子二人を呼び止める。

確か、亜矢ちゃんと椿ちゃん、だ。

「はい??」
「あ、怜奈の看護婦さんだ」
「ごめんねぇ??怜奈ちゃんの事なんだけど・・・」
「え??怜奈が何かあったんですか??」
「実はね・・・」

怜奈ちゃんと翔君が、病院を抜け出し、そしてボロボロになって帰ってきたこと、そして
今翔君が死に掛けてること、そして、怜奈ちゃんが食べ物を一つも食べてくれない事を話した。

「そ・・・そう・・・なんですか・・・」

二人は、信じられない、という表情を浮かべてる。

「・・・・できれば、元気付けて欲しいの・・」
「はい・・・頑張りますっ」
「じゃぁ、私も一緒についていくわ。」
「ありがとうございますっ」

と、3人で怜奈ちゃんの病室へと向かった。。

――――――「怜奈ちゃん??友達よ、入るね??」

そして、ドアを開けて、二人を入れた。

朝食には手をつけてすらいない。

「怜・・・奈・・・？」

生きた抜け殻のようにただただ窓の外の空を見上げてる怜奈を見て、二人はすぐに涙目になっていた。

「・・・れ、怜奈っ！！遊びに来たよっ！！元気！？」

「・・・・・・・・・」

こっちをふりむきもしない。

「怜奈ぁ・・・」

やっぱり・・・この二人でも・・・

「おーーっす！」

と、誰かが入ってきた。

入ってきたのは、林田慎。

誰かな。。。どこかで見たことあるような・・・・

あ、怜奈ちゃんと翔君を街から助けて連れてきてくれた子、だ。

「林田ぁ！！！？？」

「初めてきたぜ、病院！！この俺が来たからには、もう病気くらい・・・」

その時、怜奈の異変に気づいたようだ。

「・・・白井??お前、どうしたんだ??どこ見てんだよ??」

「・・・・・・・・・・・」

「おい、白井??」

「林田、ちょっと・・来て?」

と、椿ちゃんと亜矢ちゃんが林田君、と言う子に、説明を始めた。

私が話したこと全てを、二人が林田君に伝えた。

「・・・・・・は?」

「だから・・・・」

「・・・・ちょっと、・・・白井と話してくる。」

「ちょっ、林田!!!」

怒ってるような眼差しで、怜奈ちゃんへと歩む林田君。

「おい、白井??」

「・・・・・」

「返事しろ。白井??」

「・・・・・・」

「白井っつってんだろ!?返事しろよ!?」

一瞬怖くて、ビクリと反応してしまった。が・・・

「・・・・・」

それでも、怜奈ちゃんは、一度もこっちを振り向かなかった。

ホントに・・・どうしちゃったの・・・

怜奈ちゃん・・・

第二十二話【無】（後書き）

次は慎視点でいきますw

第二十三話【最後まで】

※慎視点です※

「白井、お前、いいかげんにしろよ！！」

なんだか分かんないけど、心の底から怒りがこみ上げてきた。

それでも、白井はこっちを見ようともしない。

「こっち向けよ。」

「・・・・・・・・・」

「こっち向けってんだろ！？」

「・・・・・・・・・」

「おい！！！！！！！！」

そして、自分の手は無意識のうちに、白井の肩を押さえつけてた。

「ちょっ、林田――――」

「黙ってろ！！！！！！」

でも、白井の目はまだ死んだような、虚ろな目だ。

「白井！！」

思いっきりベッドに押し付ける。

「・・・・・離して・・・」

「お前、何してんのか分かってんのかよ！？」

「離し・・・」

「お前がそんなんで、あいつが喜ぶとでも思ってんのかよ！？」
「・・・・・」
「お前はどーせ、自分のせいだ、自分のせいだとか思ってんだろ！？
だからそーゆう風にして死のうとでも思ってんのか！？
そんなんであいつは元気になるとでも思ってるのかよ！？」
「・・・・・ちが・・・」
「違わねーよ！！」
「・・・・じゃぁ、慎には・・・何が・・・分かるの・・・？」
白井はいつのまにか、顔を涙でグシャグシャにしてた。
「何も分からんねぇよ。」
「じゃぁ何でそんななんでもかんでもいえるの・・・・！？」
「俺なりにあいつの気持ちを考えてるんだよ！」
「それがホントの気持ちか分かんないじゃん！！」
「少なくともあたってる！！！」
「あたってない！！！」
「あたってる！！好きな人を守るために、あいつは守りに入ったんだぞ！？
それなのに、せっかく助けたのにそんな死ぬような行為して、

一番傷つくのは、あいつだろ！？」

「・・・・・・・・っ」

「アイツの為にそんな事してんのかよ！？
飯食わなかったりしたんのかよ！？
一日中そうしてただボーっとしてるままなのかよ！？」

「分かってる・・・！！」

「分かってねぇよ！！！」

「分かってるよ！！頭では！！！分かってるの！！！
翔のために・・・何かしなきゃ、そう思ってるの！！！なのに・・・・
私が悪いのに・・・・こんな・・・私だけ生きるなんて・・・
それに・・・どうせもうすぐ・・・私、死ぬし・・・」

「だからなんだよ！！！！ならあいつのために！！
最後まで笑って生きようとか思わないのかよ！？
あいつだって、これから生きられる・・・助かる可能性はたくさん
あるんだぞ！？」

「もう嫌！！！出て行って！！！慎なんて・・・・
どうして、そこまでするの・・・！？」

「・・・・お前が・・・お前が、好きなんだよ！！！だからだよ！」

「・・・・・・っ」

「頼むから・・・もうちょっとでもいいから・・・笑って最後まで・・・生きてくれよ・・・」

「し・・・ん・・・・」

やべぇ・・・俺・・・泣いてる・・・

カッコわりぃな・・・

「ごめ・・・っ・・・ごめん・・・ね・・・」

「白井・・・」

「でも・・・っ・・・でも・・・私・・・翔が・・死んじゃうかもと思うと・・・私っ・・・私・・・っ!!」

「死んじゃうかも、って思うなよ。そう思わなければいいじゃん・・・

あいつは、きっと助かる・・いや、絶対助かる。」

「うん・・・」

「じゃぁ、俺は今日はもう帰るな。」

「・・・・・・・・・・」

「じゃぁ」

「・・・・・・・・・りがと・・・」

・・・・『ありがと』。

そして、ちょっと笑みをこぼして、病室を出て行った。

その後、ちょっとして、後ろから椿亜矢が走ってきた。

「やるじゃん林田！！」

「さすが男★」

「っせーよ？」

そして病院を出た。。

白井は、これできっと元気になる・・・はず・・・

でも、知らなかった。

白井はそれで元気にならなかったこと。

数日後に白井が死ぬ、という運命を知らない俺は、気楽に3人で帰っていた。。

第二十四話【願い事】

「――――――っ！！」

久々にご飯を喉に通した。
でも、胃はその食べ物を受け付けようとはしない。

「げほっ、げほ・・・っ」

結局、また食べたものを吐いてしまう始末。
最近、いつもこうだ。

慎が慰めにきてからは、食べるようになったんだけど、
その後３０分もたたないうちに吐いてしまう。

そのせいで、体は更に細く痩せて、もう驚くほどにガリガリだった。
細くなった自分の腕を見て、また少し涙がでる。

「怜奈ちゃん、大丈夫？」
中沼さんが背中をさすってくれる。

「げほ、げほっ・・・」

また世界が涙で滲んだ。

どうして・・・・

――――――夜。
星空を眺めてた。

そして何度も何度も溜め息をこぼした。

もしも・・・このまま、私死んじゃったら・・・
その後、翔が目を覚ましたら、心配・・・するんだろうな・・・

そして、迷った末に思いついたのが、手紙。

前に卒業旅行前に書いたときは、告白の返事で・・・
あの時は、手紙書くとき、とても緊張してて、ドキドキしてて・・・
あの頃に・・・戻りたいよぉ・・・

ボロボロと涙が溢れ出した。

震える手で、ペンを握る。

『翔へ
今まで・・・』

と書いたところで、シャーペンが手からスルリと抜け落ちた。
カツン、という音が部屋に響いた。

そのとたん・・・何かが心の底深くで音を立ててくずれた。

翔・・・翔・・・
ごめんね。ごめんね？
「うー・・っく、うえぇ～・・・・」
お願いだから。神様。
最後に一つだけでいい。
翔を幸せに・・・
もう・・・翔をこれ以上・・・苦しませないで・・・？
私はどうなってもいいから。死んでもいいから・・・

この世界に神様なんて、いるのだろうか。
正直いうと、今の私は神様をいるといえない。
神様を信じられない。

でも・・・信じたい。
神様がいるんだと、信じたい。
信じたい。

もうすぐ私の行くことになるだろう、星空に。

精一杯。精一杯祈った。

精一杯願った。

どうか、この願い事が、神様に、届きますように・・・

第二十五話【死】

体が・・・熱い。
きつい。もう、指を動かすことさえ辛い。

いつもと体の調子がちがう、ということに気づいた。

息が出来ない。
体中がガクガクしてる。

震えてる。

それは、病気からの震えなのか。
それとも死への恐怖の震えなのか。

分からない。

中沼さんを呼ぼうと、体を起こしたその時。

「――――――――っ！！」

なんともいえないくらい、体中が痛くなる。
一つ一つの細胞が爆発しそう、て感じ。

耐え切れなくなって、体の力を抜いてしまう。
床に強く叩きつけられた。

もう・・死んじゃう・・・の？

がららら、とドアが開いた。

「怜菜ちゃんっ！？」

中沼さんだ。

「な・・ぬま・・さっ」

声にならない叫び声で助けを呼ぶ。

でも、急に何かがプツ、ときれて。

意識が途切れた。

――――――――・・・？

気がつくと、私は自分の前に立っていた。

手術室のような場所。

そのベッドの上で、私が寝ていた。

周りで、よく私の審査をしていた医者の先生が、心臓マッサージ、

ていうのかな。

そんな事をしてる。
中沼さんが必死に祈ってた。
誰も自分には気づいていない。
これ、夢・・・？

寝ている私自身の顔は、もう真っ青で、というより、生きてる感じがしていない。
見ていられなくなって、外に出ようとした。
か、鍵が・・・かかってる。
どうしよう、とドアに手をおくと。
『わっ』
自分の体が壁を通りぬけた。
壁があるのに、そのまま外に穴があいてたかのようにすりぬけたのだ。
外には、お母さん、お父さん。
亜矢、椿、慎、香織。
翔のお父さん、お母さんまでいる。
みんな泣いたり、祈ったりしてる。
やだ。

やだやだやだ。

みんなやめて。

私は死んでない。ここにいるよ？

泣かないで。泣かないで。泣かないで。

お母さん、お父さん！

私、ここにいるよ！？

椿、亜矢、慎、香織！どうして泣くのよぉ！？

翔の・・・お父さん・・・お母さん・・・

お願いだから、泣かないでよ・・・

泣かないでよぉっ・・・

そうだよ。これは夢。夢、なんだよね？

夢だよね？夢だよね？夢、なんだよ

今までのこと、全部、夢、だったんだ。

――――――――夢、だったらいいのに・・・

手術室から、ピーーー、という心拍数がゼロになる音が聞こえてき

た。

そのとたん。

『やだ。やだよ・・・！』

自分の体がだんだん薄く、透けてきた。

先生が出てきて、こう告げた。

「全力を尽くしたのですが・・・」

そのとたん、みんなが泣き出した。

『死んでない！死んでない！私、ここにいるよってば！』

体がどんどん透けていく。

そうだ、翔・・・！

そして、翔のいる病室に走り出した。

――――――――壁を通り抜けて、翔の病室に入った。

いつもと変わらず、眠っている。

そして静かに、触れることのできないキスをする。
触ろうとしても、透けて通り抜けてしまう。
精一杯作り笑いをする。
どうか・・・目を・・・覚ましますように。
そしてまた、幸せに・・・

そして私は、完全に消えて、空へと消えた。
空は今日も、綺麗な青色で、広大で、どこまでも続いていた。

第二十六話【目覚め】（前書き）

翔視点でございます！！

第二十六話【目覚め】

――――――「・・・・」

気がつくと、見慣れない部屋。

雨が降っていた。

ジメジメしてて、汗びっしょりだった。

寝る前の事を思い出せない。

でも、何だか。とても心がザワザワする。

何だよ、この気持ち。

きもちわりぃ。

そうだ。怜菜は？

怜菜はどこに？

その時、ドアが開いた。

親父とお袋だ。

「しょ、翔・・・っ！！」

目が真っ赤にはれている。

「目を覚ましたんだなぁ、よかった・・・」

二人とも、何故そんなに顔が腫れている？

泣いてた？何で？どうして？

俺が目を覚まさないから？

でも、そんなに毎日泣くのか？

その涙を理由に、心のもやもやを消したい。

そうだよ。絶対二人が泣いてたから心がモヤモヤしてたんだよ。

でも。不安で・・・たまんねぇ。

何も・・・おこってなければ・・・いいんだけど、な。

恐る恐る聞いてみる。

「・・・泣いてた、の？」

沈黙の波がやってきた。

そして親父が口を開いた。

「葬式に行ってたんだ。」

まさか。

まさか、そんな訳。

もしかして、その葬式は、怜菜の葬式ではないのだろうか。

ドクン、ドクン、と心臓が高鳴る。

「・・・誰の・・・・葬式だ・・・・？」

言いずらそうな顔をして、やっと口を開いた。

「怜菜ちゃんの、だ」

体が凍るように、固まった。

俺が・・寝ている間に・・・・あいつが、死んだ・・・・？

「いつ・・・・」

「？」

「いつ、死んだんだ・・・・？」

「・・・・一昨日。」

ああ。

心のモヤモヤは、このことだったんだ。

こみ上げてくる涙を必死にこらえて、タンスに手をかけたその時。

カサ、と何か紙が手に当たる。
「？」
それは。
怜奈が死んでしまう二日前に怜奈が書いた、手紙だった。
「――――――っ！」
手紙をもって、「ちょっと散歩！」と病室を出る。
そして裏庭へ向かう道を歩いてたとき。
「翔君っ！」
と呼ばれる。
振り向くとそこには、怜奈を担当してたナースの中沼さん。
「目、覚めたの！？気がついたの！？」
「はい・・」
「怜奈ちゃんのこと・・・」
「聞きました。死んだって・・・」
「・・・そう・・・。あ、ちょっと来て？」
と、半分無理やり連れて行かれる。
――――――――「・・・これ。」
と、中沼さんが差し出してきたのは、紙の山。
「・・・捨てろってですか？」

「違うわよっ（汗！コレ全部、あなた宛。」
「・・・・誰からっすか」
「怜奈ちゃん。」
「・・・・・・・」

バッ、と紙を全て強引に貰い、また外へと走り出した。

――――――かた、とベンチに腰をかける。
そしてまず、何のためらいもなく、最初に見つけた手紙を開いた。
そして手紙の最初の文字に目を向けたとたん、胸のそこ深くが熱くなった。
まだ読んですらないのに、涙がこみ上げてきた。
ずっと、我慢してたんだ。
そして、手紙を読み始めた。

第二十七話【メッセージ】（前書き）

また翔視点です！！

第二十七話【メッセージ】

震える手を押さえながら、手紙を読み始めた。

『翔へ
まず一つ、最初に言わせて。ごめんね。
本当にごめんなさい。
もうすぐ、私、死ぬと思うの。
だから、その前に伝えたいこと。全部書くね。

翔、今手紙読んでるってことは、私その時はもう・・・死んじゃってる、かな。
翔が目を覚ますってことを信じてこの手紙、書くからね。
あのね？本当は、私、まだ、死にたくないよ
もっと翔と話したいし、いろんな事したい。
結婚したりとか、子供作って家族で一軒家に住んだりとか、一緒に旅行に行ったりとか。

でも無理だよね。

実はね、私、病気になる直前に、失恋してたの。
海斗って人にだけどね。
で、その後、もう絶対恋はしたくない、って思ってたの。でも、
翔がまた、私に恋愛させちゃって。
私がこんなに悲しいのは、翔のせいだからね。
・・・・なんて、嘘だよ。

翔と会えて、うれしかった。本当だよ？
私に、人生の最後に、短い恋をありがとう。

大好き。大好き。伝えられないほど大好きです。
届きそうで、届かない。
それがきっと、今の私と翔との距離。
もしも悲しくなったときは、空を見上げてね？
私、空からいつでも翔のこと、見てるからね？
今もだよ？この先、ずぅっと！！

死んでも大好きだよ。生まれ変わってもだよ！
この先、何があろうと、絶対に、変な事はしちゃだめだからね？
新しい恋はしていいけど、浮気だけはしちゃだめだからね？

本当に、本当に、翔。ごめんね。
そして、本当にありがとう。

ずっとずっとずうっと、大好きです

怜奈』

世界中が音をたてて崩れた気がした。
胸からとめようとしてもあふれ出してくるこの気持ちを。

他の手紙も目を通してみる。

でも全て書きかけだった。

涙でぬれている跡がある。

泣いてたんだ。

ごめんな。怜奈。

そっと空を見上げた。

あぁ。

空が。

青いな。

空色ダイアリー

ねぇ、翔。

もしも翔と出会ってなかったら、今頃私、どうしてるかな。

届きそうで、届かない。
それは私と翔との距離。

手紙に書いてたこの言葉。

きっとみんな、そうなんだ。

頂点に上り詰めた恋人だって、まだ本当の頂点には行っていない。

だって、明日もあるじゃない。

これからもずっと、未来があるじゃない。

一生、ずっと愛し合えた、恋人。

それで本当に、距離が届くんだろうと思うよ。

そして、ほら。

お母さんも、お父さんも。
椿も亜矢も慎も海斗も咲も中沼さんも。
翔のお父さんお母さんも。

翔も。

悲しいとき、空を見上げて。

私がいつでも、慰めてあげる。

イアリー〜完〜

空色ダ

By 作者

今まで読んでくれた皆様！

本当に、ありがとうございました！！

この空色ダイアリーが、私の記念とする初めての小説だったので、ちょっと下手なところもございましたが、どうか温かい目で見守ってください！！

また、感想・アドバイス等ありましたら、バンバン言ってください！

空色ダイアリー、番外編などを書く予定なので、お暇がありましたら、一度目を通してやってください！

また、我侭ですが、できれば他の小説にも目を通してくれたら感激です！

これからもいろいろ書いていくつもりですので！

では、皆様、本当に、ありがとうございました！！

また今後とも、よろしくお願いします！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1000i/

空色ダイアリー

2010年10月12日13時55分発行